

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02308

研究課題名（和文）ポストジャポニスム期における日本とフランスの美術文化の相互交流の深化と拡散の研究

研究課題名（英文）Study of the Deepening and Diffusion of Mutual Exchange between Japanese and French Art and Culture in the Post-Japonisme Period

研究代表者

藤原 貞朗（Fujihara, Sadao）

茨城大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：50324728

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：ポストジャポニスム期（1920～30年代）の日本とフランスの美術文化の相互交流の研究は一部の芸術家を対象とした個別研究はあるが、総合的に研究されることはなかった。この時期が文化交流の停滞期とみなされてきたからである。しかし、単なる美術文化の流行的現象を終え、日本文化の理解が深化し、欧米全体に日本文化が広く拡散したのが1920～30年代であり、相互の美術と美学は真の意味で深い影響を与えていた。本研究は文献調査とフィールドワークによって、その内容と受容の様相を分析し、これまで正当に評価されてこなかったポストジャポニスム期の日仏相互の美術文化・美学の交流の深化と拡散のプロセスを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の日仏文化交流の研究はジャポニスム期を軸になされてきたが、本研究は交流の停滞期とされている1920～30年代こそ両国の文化交流にとって重要な時代だったことを明らかにした。これまで空白にされてきた20世紀前半期の日仏文化交流史に新たな視座を提示した点が独創的である。社会的意義についていえば、21世紀の「クールジャパン」を「第二のジャポニスム」と称する言説もあるが、それでは20世紀前半を文化交流の空白期とみなすことになる。本研究は19世紀のジャポニスムと21世紀のクールジャパンの間の空白を埋めるものであり、現在のジャポニスム言説を正しく意味づけ、その文化的意味を議論する契機となる。

研究成果の概要（英文）：Although there have been many studies on the mutual exchange of art culture and aesthetics between Japan and France during the Japonisme, there have been no comprehensive studies of the so-called post-Japonisme period (1920s-1930s). This is because this period has been regarded as a period of stagnation. However, it was during the 1920s and 1930s that Japanese art and culture ceased to be merely a fashionable phenomenon and deepened in artistic and intellectual understanding, and Japanese culture spread widely throughout Europe and the U.S. It was during this period that mutual art and aesthetics truly and deeply influenced each other. This study analyzed the content and aspects of the reception of Japanese art and aesthetics during the post-Japonisme period through literature research and fieldwork, thereby clarifying the process of deepening and diffusing mutual exchange of art culture and aesthetics between Japan and France, which has not been properly evaluated until now.

研究分野：美学・美術史

キーワード：ポストジャポニスム 日仏文化交流 ジャポニスム

1. 研究開始当初の背景

ポストジャポニスム期(1920~30年代)の日本とフランスの美術文化及び美学の相互交流の研究は、一部の芸術家を対象とした個別的研究はあるが、ジャポニスム期のように全体として総合的に研究されることはこれまでなかった。この時期が文化交流の停滞期とみなされてきたからである。しかし、単なる流行的現象を終え、美術文化の理解が深化し、広く拡散したのが1920~30年代であり、この時期こそ、相互の美術と美学が真の意味で深い影響を与え合ったのではないか。文献調査とフィールドワークを行い、その内容と受容の様相を分析することによって、これまで正当に評価されてこなかったポストジャポニスム期の日仏相互の美術文化・美学の交流の深化と拡散のプロセスを明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、正当に評価されているとはいえない1920~30年代の日仏相互の文化交流について、文献調査とフィールドワークを行い、その内容と受容の様相を分析することによって、ポストジャポニスム期の日仏相互の美術文化・美学理解が深化し、拡散するプロセスを総合的に明らかにした。応募者は2009-11年(H21-23)に挑戦的萌芽研究として「ポストジャポニスム期のフランスにおける日本美術受容の研究」を課題にして、欧米の浮世絵理解が19世紀後半期のブーム以後、1920年代以降に、より深まりをみせ、その受容者と解釈が大きく変動するプロセスを明らかにした。その後の継続的研究として、浮世絵に限らず、他の美術文化分野でも同様のことがいえるのではないかと仮説のもとに、相互の美術文化の深化と拡散による変化を丁寧にあとづける研究を今回の課題の目的とした。

3. 研究の方法

1920~30年代の日仏相互の美術文化交流を総合的に研究することを目標とし、研究期間内で段階的に研究を進めた。

(1) 1920~30年代に出版された日本語文のフランス美術文化論の書誌的調査

(2) 1920~30年代に出版された仏文の日本美術文化論の書誌的調査

(3) 1920~30年代に出版された日本語文のフランス美術文化論に関わる雑誌の調査

(4) 1920~30年代に出版された仏文の日本美術文化論に関わる雑誌の調査

(5) (1)と(2)に関してメルクマールとなる書籍の抽出と内容分析、および受容の分析

(6) (3)と(4)に関してメルクマールとなる雑誌の抽出と内容分析、および受容の分析

以上のプロセスで、研究期間内に、資料体(コーパス)と書誌の作成、および、メルクマールとなる重要な書籍や雑誌の内容分析と受容の分析を行った。とくに、第一次大戦前(ジャポニスム期)と以後(ポストジャポニスム期)のフランス側の日本美術文化理解の変化について明らかにした。

4. 研究成果

(1) 藤田嗣治や長谷川潔といった個別の作家・作品研究ではなく、広く美術文化と美学全体の相互交流の深化と拡散を総合的に研究し、従来のジャポニスム研究と同じように総合的な文化潮流として1920~30年代の日仏文化交流を捉え直した。個々に活躍した作家が、いかに全体としての日仏の文化交流に寄与したのかを計測することは容易ではないが、展覧会活動や雑誌の反応をじっくりと検証するなど、とくに受容的側面からのアプローチによって文化交流全体を総合的に捉えることに成功した。

また、英文で出版された岡倉覚三(天心)の『東洋の理想』(1900)と『茶の本』(1906)は、前者は第一次大戦時の1917年に、後者は1910年代末~1920年代に仏訳版が刊行され、とくに後者は挿絵入版など複数の異本が出て版を重ねたことを調査によって明らかにするとともに、『形の生命』で知られるアンリ・フォションはこれらの著作から影響を受け、自らの美術論を発展させた点を明らかにした。

(2) 従来、研究されることのなかった著作物を発掘し、それらをデジタル化して分析可能なコーパスを作成した。たとえば、日本におけるフランス美術文化の深度を図るために、ミラトン他著、永野芳夫訳『美術と文芸との暗示によるフランスの終身教授』(1924)、荒城季夫篇『仏蘭西現代作家画集』(日仏芸術社、1927)、川路柳虹『マチス以後 仏蘭西絵画の新世紀』(1930)

『フランス美術展覧会図録 十周年記念』(1931)外山卯三郎『最新フランス絵画研究』(1932)坂垣坦『十八世紀フランス絵画の研究』(1936)等。文化全体の受容風潮を知るために、重徳泗水『仏蘭西文化の最新知識』(1922)吉江喬松『仏蘭西文芸印象記』(1923)島崎藤村『仏蘭西紀行』(1924)桑原武夫『フランス印象記』(1931)デュウラン著、小松清訳『仏蘭西音楽夜話』(1931)竹内勝太郎『現代仏蘭西の四つの顔』(1930)後藤末雄『仏蘭西精神史の一側面』(1934)等。日仏文化史の理解度を知るために、後藤末雄『支那思想のフランス西漸』(1923、1933)小林太市郎『支那と仏蘭西美術工芸』(1937)を調査した。

(3)(2)と同様に、仏文の日本美術文化論(翻訳も含む)の書誌的調査とデジタル化、および分析可能な資料化を実施した。仏人による日本美術文化理解を理解するために、Raphaël Petrucci, *La philosophie de la nature dans l'art de l'Extrême-Orient*, 1912; Henri Focillon, *L'Art bouddhique*, Paris, 1921; Serge Élisseev, *La peinture contemporaine au Japon*, Paris, 1923; P. Poncetton, *Les gardes de sabre japonaises*, Paris, 1924; Serge Élisseev, *Le théâtre japonais Kabuki*, Paris, 1925; George Salles, « L'art de l'Extrême-Orient », *La Nouvelle histoire universelle de l'art*, tome 2, 1932; Serge Élisseev, « L'art du Japon », *Histoire universelle des arts des temps primitifs jusqu'à nos jours*, tome 4, 1939.等、日本から発信された文化論への反応を知るために、Kakuzo Okakura, *Les Idéaux de l'Orient*, 1916; Anesaki, *Quelques pages de l'histoire religieuse du Japon*, Paris, 1921; Foujita, *Legendes japonaises*, Paris, 1923; Kakuzo Okakura, *Le Livre du thé*, Paris, 1927. 等、東西文化の影響関係の理解を図るために: Emile Hovelague, *Le Japon*, Paris, 1921; René Grousset, *Histoire de l'Asie*, tome III, Paris, 1922; William Leonard Schwartz, *The Imaginative Interpretation of the Far East in Modern French Literature 1800-1925*, Paris, 1927.

(4)(2)・(3)と同様の手法で、日欧の雑誌の所収論文も収集調査し、データ化した。美術雑誌として、『美術新報』、『藝術』、『中央美術』、『みづゑ』、『現代の洋画』、Émile Deshayes, « L'Exposition rétrospective d'art japonais à Londres », *Bulletin de la Société franco-japonaise de Paris*, 1911, Paris; Marquis de Tressan, « L'évolution des gardes de sabre japonaise », op.cit., 1912; rapport de la conférence au Musée Guimet par Cl. Maître, « L'iconographie japonaise », 1921; Rapport de la Conférence au Musée Guimet par Maître, « L'architecture japonaise », 1924. フランス文化紹介に頁を割く文芸誌『白樺』、『中央公論』、『仏蘭西時報』、『ふらんす』、『日仏文化』、『仏蘭西文藝』、美術品目録として、黒田鵬心編『仏蘭西現代美術展覧会目録(大正11年5月)』(1921)水平讓『仏蘭西現代美術展覧会』、『秋田魁新報』(1923.06.02、06.06~08)国民美術協会編『仏蘭西現代美術展覧会 作品目録』(1924)泰西社編『仏蘭西名画集』1~6号(1924~25)日仏芸術社編『仏蘭西美術展覧会図録』(1928)倉敷文化協会『現代仏蘭西名画家作品集 大原孫三郎氏所蔵』(1929)青樹社編『仏蘭西絵画展覧会目録』(1935)『エミール・ベルナール作品展覧会 仏蘭西古典作品展覧会』(日仏画堂、1936)Catalogue du 5e Exposition des Arts de l'Asie; Collection Victor Goloubew au Musée Cernuschi, Paris, 1914; Gaston Migeon, *Musée du Louvre, l'estampe japonaise, documents d'art*, Paris, 2 vol., 1923; *Ars Asiatica XIV: Peintures chinoises et japonaises de la Coll Ulrich Odin*, Paris, 1929.

日本の美術文化全般の理解の深度を知るために、*Japon et l'Extrême-Orient* (1923-1924, revue mensuelle dir. par Claude E. Maître), *Études asiatiques*, 2 vol, Paris, 1925; V. F. Veber, *Koji Hôten, Dictionnaire à l'usage des amateurs et collectionneurs d'objets d'art japonais et chinois*, 1925.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Fujihara Sadao	4. 巻 12
2. 論文標題 Book Review: Michael Falser. Angkor Wat: A Transcultural History of Heritage, Volume 1, Angkor in France. From Plaster Casts to Exhibition Pavilions; Angkor Wat: A Transcultural History of Heritage, Volume 2 Angkor in Cambodia. From Jungle Find to Global Icon. Boston: De Gruyter Art & Architecture, 2019	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Southeast Asian Studies	6. 最初と最後の頁 206-210
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤原貞朗	4. 巻 29
2. 論文標題 五浦美術文化研究所の創設と草創期の活動をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 五浦論叢	6. 最初と最後の頁 163-178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤原貞朗	4. 巻 41
2. 論文標題 ルネ・ユイグと共和国の美術史編纂 モダニズム終焉の認識とネオ・ユマニスム	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日仏美術学会会報	6. 最初と最後の頁 91-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Fujihara Sadao	4. 巻 1
2. 論文標題 De l'Affaire Banteay Srei au Musee imaginaire. Andre Malraux dans le contexte de l'archeologie asiatique entre les deux guerres	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Malraux vu du Japon. Roman, essai et arts	6. 最初と最後の頁 81-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.48611/isbn.978-2-406-13355-1.p.0081	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原貞朗	4. 巻 1
2. 論文標題 バンテアイスレイ事件から『想像の美術館』へ アジア考古学史のなかのアンドレ・マルロー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 永井敦子ほか編『アンドレ・マルローと現代』	6. 最初と最後の頁 118 - 138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原貞朗	4. 巻 11
2. 論文標題 ジャン・カリエスと芸術的な炷器の誕生	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ふらんす	6. 最初と最後の頁 15 - 19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原貞朗	4. 巻 91
2. 論文標題 『幻想の中世』と近代の日仏文化交流 中世美術史家と東洋学者のネットワーク	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日仏文化	6. 最初と最後の頁 69 - 79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原貞朗	4. 巻 5
2. 論文標題 ピカソからマネへ 1932年のマネ生誕百年記念展とアナクロニズムの歴史編纂	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 茨城大学人文社会科学部紀要 人文コミュニケーション学科論集	6. 最初と最後の頁 77 99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤原貞朗	4. 巻 51
2. 論文標題 書評 範麗雅著『中国芸術というユートピア』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国21	6. 最初と最後の頁 229 232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原貞朗	4. 巻 1
2. 論文標題 両大戦間期のエドゥアール・マネ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 稲賀繁美編『映しと移ろい』	6. 最初と最後の頁 392 409
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原貞朗	4. 巻 1
2. 論文標題 天心の 子ども たち 日本美術史の思想はどう継承されたのか	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 井上章一編『学問をしぼるもの』	6. 最初と最後の頁 53 - 71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原貞朗	4. 巻 47
2. 論文標題 近代日本人はいかにして中国古美術研究へと向かったか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国21	6. 最初と最後の頁 103 - 120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原貞朗	4. 巻 41
2. 論文標題 大戦間および戦時のインドシナ学をめぐる日仏東洋学者の学術交流	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 通信	6. 最初と最後の頁 61 - 70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 藤原貞朗
2. 発表標題 ジャポニスム学会国際シンポジウム「ジャポニスムと東洋思想」開催趣旨および総括
3. 学会等名 ジャポニスム学会 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤原貞朗
2. 発表標題 ルネ・ユイグとネオユマニスム
3. 学会等名 日仏美術学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤原貞朗
2. 発表標題 幻想の中世と近代の日仏文化交流
3. 学会等名 日仏会館日仏文化講演
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤原貞朗
2. 発表標題 パンテアイスレイ事件から『想像の美術館』へ、アジア考古学史のなかのアンドレ・マルロー
3. 学会等名 国際シンポジウム アンドレ・マルロー再考、その領域横断的思考の今日的意義（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤原貞朗
2. 発表標題 フランスのインドシナ学と日本
3. 学会等名 日仏東洋学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤原貞朗
2. 発表標題 大戦間および戦時のインドシナ学をめぐる日仏東洋学者の学術交流
3. 学会等名 日仏東洋学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 藤原貞朗	4. 発行年 2023年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 454
3. 書名 共和国の美術 フランス美術史編纂と保守 / 学芸員の時代	

1. 著者名 (共同編集) ジャポニスム学会編 (高木陽子・村井則子・高馬京子・藤原貞朗編集)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 344
3. 書名 ジャポニスムを考える 日本文化表象をめぐる他者と自己	

1. 著者名 (共著) 茨城大学社会連携センター・五浦美術文化研究所編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 216
3. 書名 岡倉天心 五浦から世界へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------